

たまたま、府中の本屋で面白い水彩画の本を見つけた。平積み of 表紙絵が良かった。ペラペラめくって見ていたが、買って帰った。『水彩画プロの裏ワザ』(奥津国道・講談社) という入門書だ。

私は、これまでに水彩画、淡彩画の本を 20 冊余り買ったが、プロが技術のノウ・ハウをさらけ出しているのは、網干啓四郎の『スケッチ・淡彩上達コース』と本書だけではないかと思う。大体が初心者に対しての講釈であって、何の役にも立たぬお喋りに終始している。

『裏ワザ』(この言葉、古臭い) を既に読まれた方も多いと思うが、優れた点を幾つかあげて、『上達コース』にはなかった点を指摘して見たい。その一つが、「グリサイユ画法」である。

「色を着彩する前にグレーやセピアなどで影を描きこんでしまうのである。影には明暗がある。濃い影は濃い色調で描き、明るい影は明るい色調で描く。」(72 ページ)

と言い、一つ一つ著者の作品を 8 段階に順序立てて挿入している。さらに

「デッサンには 3 分の 2 の時間を当てる……私のように強く明快な線で描くと、鉛筆の線と着彩した色は一体となって絵を構成する。つまりデッサンは下描きであると同時に完成された線でもあるのだ。……目を凝らして観察し、根をつめて描き込んでいる。風景と真剣勝負で格闘している……ところが、鉛筆デッサンが終って着彩を始めると、とたんに楽しくなって鼻歌まで出てくる。」(89 ページ)

昔むかし、網干さんから新宿御苑で桜の花の描き方を習ったときの「講釈」の中に、なるほど、と唸るような一節があった。――スケッチ(デッサンのことだが、網干さんはスケッチと言う)は、言うなれば列車における機関車であり、彩色は客車である。機関車がしゃんと牽引しなければ客車を連結した列車は運行目的を達成できない。大事なものはスケッチであって、スケッチがしっかりしていれば、彩色は楽である。ただスケッチのあとについて行けばよい、というような趣旨であった。

網干流と奥津流には 6 号を仕上げる際のデッサンと彩色の時間配分に差があるようである。奥津さんは、6 号を描くのに大体 3 時間かけるが、デッサンに 2 時間かけるという。網干さんが実際にデッサンから彩色まで描くところを見たことはないが、6 号を仕上げるのは 2 時間以内ではなかろうか。しかも、デッサンにかかる時間は 3 分の 1 から 2 分の 1 ではなかろうか。奥津さんの水彩画より網干さんの昔の淡彩画の方が好いな、と思う。私の時間配分は 6 号の場合 1 対 1、ないし 1 対 2 である。しかも 3 時間というのは今や、体力の上で無理。せいぜい 1 時間半である。1 時間が多い。10 分休んで、もう一枚と言うところである。6 号のスケッチ・ブック、アルミ椅子、絵具、筆、その他諸々を背負うのがかなりつらくなった。

自分では、年寄なんてう気は毛頭ないのだが、どうやら年寄になったらしい。家の近所を徘徊しては、1 時間ないし 2 時間毎日のようにデッサン・彩色してるが、この折の道具立ては、小型の絵具箱と 2 号スケッチ・ブックをズボンの尻ポケットに入れる。ティ・シャツの片方のポケットに三菱のノック式水性ボール・ペン(1.0)とゼブラの油性ボール・ペン(1.2)を、もう片方のポケットに水筆を二本入れるだけだ。この他は、アルミ椅子をむき出しのまま持参する。今日、ムクゲの花を描いていて気がついた。そうだ、奥津流のデッサンを 2 号で、じっくり描けば、これを 5 号、6 号に拡大するのは意外に容易かもしれない。第一、理に適っているではないか。訓練してみたくなった。10 月展の 1 点はこの新しい技術で描いてみよう。

(2003-8-10)